

大 学 図 書 館 問 題 研 究 会 京 都

〒607 京都市山科区大宅山田町34
(Tell) 075-574-4118

京都橘女子大学図書館 小林倫道気付
(Fax) 075-574-4124

第 2 回 大 学 図 書 館 員 京 都 研 究 集 会 開 催 !!



12月4日(土)、立命館大学末川記念会館において第2回大学図書館員京都研究集会が開催され、3本の研究報告(見学を含む)が持たれました。参加者は16名でした。予定された順序を変更して立命館大学の報告から行われ、質疑応答を含め充実した内容の研究集会となりました(写真。次頁に報告要旨)。

目 次	第2回大学図書館員京都研究集会報告要旨・・・・・・・・・・ 2頁
	京都支部研究集会へ参加して：感想(酒井忠志)・・・・・・・・ 3頁
	京都研究集会に参加して(村上健治)・・・・・・・・・・ 4頁
	第2回京都研究集会に参加して(堤豪範)・・・・・・・・・・ 5頁
	立命館大学雑誌コンテンツシステムを見学して(小林直子)・・ 6頁

第2回大学図書館員京都研究集会報告要旨

立命館大学雑誌コンテンツ検索システムについて

報告者：松原 修（立命館大学図書館）

立命館大学では1993年 9月から所蔵分以外のもも含む 7,000タイトルの外国雑誌のコンテンツ情報が検索できるようになった。RUNNERS（立命館大学学術情報システム）の蔵書検索システムからコンテンツ検索システムを呼び出し、雑誌のタイトル、キーワード、執筆者などを入力して検索する方法になっている。システムの概要の説明の後、図書館に移動してシステムが実際に稼働するところを見学しました。

教科書の歴史とその所在を求めて

報告者：竹村 心（京都大学教育学部図書室）

近代以前の身分制社会では、教科書は『往来物』と呼ばれ、身分に応じてそれぞれの子弟のために、別々につくられた。明治維新を経て近代学校制度が成立し、除々に教科書が統一（統制）されていく。以後教科書制度が変わるにつれて、教科書も変わってゆく。この変遷区分を的確におさえることの重要性が強調されました。ところで実際に特定の教科書を探そうと思っても、網羅的な目録がなく、比較的系統立てて収集している教科書図書館でも完全とはいえないようです。そんな教科書の収集と保存をめぐるさまざまな問題があることを教えられました。

海外における出版物価格の高騰と図書館の対応

報告者：篠原俊夫（京都大学法学部図書室）

雑誌価格の高騰がアメリカの大学図書館におよぼした深刻な影響とその原因の分析および対応策が報告されました。予算の増額がほとんど不可能という条件のもとでは、何かを切りすてざるをえず、雑誌の見直しの手順において、いかに教員を納得させるか具体的なマニュアルが紹介されました。

去年に引き続き、第2回京都研究集会を開催することができました。「現場に役立つ知識」をモットーに今後定着させてゆきたいと思います。尚、報告の詳しい内容は発表者本人に執筆して頂き、支部報に掲載する予定です。

京都支部研究集会へ参加して（感想）

酒井忠志

久しぶりに京都支部の研究集会に参加した。開会の前にロビーで懐かしい顔と話している時間が楽しかった。しかし、京都学園大学の方を立命館の方と取り違えるなど、とんだ失礼をしでかして、俺も焼きが回ったものだと情けなかった。

とはいえ、竹本さんのきちんと社会科学の基本を踏まえた図書館論議や、製本にのめり込んだ、女性のほうの堤さんや篠原さんの話はすなおに共感できて、やっぱり大図研らしくていいやと思った。

最初に立命館大学のRUNNERS：コンテンツ検索システムの説明があり、現場で実演を見せてもらった。噂に聞く立命館の機械を見るのは初めてであったが、そこには、かつて、単館の手作業によって小規模に試みられたコンテンツ・サービスの作業が、新たな電気仕掛けによって大規模に実現していた。外からの支援を取込みながら、導入された技術の進歩をまのあたりに見る思いがする。同時に、よって立つところの諸原則に照らし、はたして図書館は発展したのか、とも想わざるをえなかった。また、このシステムが教職員学生からどう評価されているかについての率直なレポートもほしかった。

雑誌価格の高騰と図書館の対応という篠原さんの報告は、例によって最近のアメリカの文献を渉猟し、駆使し、よく整理された得難いものであった。これだけの材料を只で提供してもらって自由に討論できる場なんてものは、そうざらにあるものではない。

アメリカの大学図書館が、財政困難からくる購入雑誌の見直し（本質を誤魔化す役人用語としか思えない「見直し」なんてことばは、研究会の討論にふさわしくない。実質は削減なのだから、ありのまま正確にそう言えばよい。）のノウハウを、こんな風に議論しているのかと改めて教えられたが、その内容たるや、よく言えば緻密、悪く言えば些末なあの手の手の問題に終始して、なんだか淋しくなってしまった。

雑誌削減の代替手段としても、さまざまな電子機器、通信システムの利用と移行が論じられ、試みられる。この論理の方向をさらに延長したとき、行着く先で図書館の存在はどうなるのであろうか。肯定的であれ、否定的であれ、この古くからの設問への回答は、今なお難である。折しも、つい先日（12月20日）、NHKがマルチメディア社会の展望と題した特集で「図書館や映画館も必要なくなるかも知れません」とのたもうた。私はそう簡単に図書館の存在理由がなくなるとは考えていないが、世の中にはそういう議論もあることだし、ここ一番、図書館界は禪を締め直さんといかんと思った。

主題に取り組む図書館員の正統派、竹村さんから教科書の歴史・収集・保存に関する報告があった。配布されたプリントの内容は膨大で、満々たる意欲を感じる。しかし、物理的に限られた時間枠のなかで、これだけの内容を詳細に論じるのは、どだい無理である。ワープロのハプニングもあったらしく、流汗淋漓の竹村さんがいささか気の毒だったが、今回は、この中のどこかに的を絞った話をじっくり聞きたいものである。

帰路、車中で湖城さんからパソコンのあれこれを教えてもらって大変有益であった。こうした、人々が交流できる機会をできるだけ頻繁に提供することが、大図研の支部運営にとって、今もっとも大切なことなのではないだろうか。

京都研究集会に参加して

村上健治 (国立民族学博物館図書室)

師走の最初の土曜日に立命館大学末川記念会館でおこなわれた第2回京都研究集会に参加した。熱のこもった3本の報告が、それぞれ1時間づつおこなわれた。

「立命館大学雑誌コンテンツ検索システムについて」は、今年の9月からおこなっている、外国雑誌の目次情報のオンライン検索の報告と実演であった。このサービスのもととなるデータはオランダのSWEETS社が作成したもので、雑誌約7,000タイトルの目次情報が入っている。対象雑誌の分野は理工学・医学が中心ではあるが、主要な人文・社会系の雑誌も含まれているようだ。これらの雑誌の目次情報の検索が、オンラインで端末からできるようになっている。また今年4月からは教職員を対象にSDI(選択的な情報の提供)サービスをおこなっている。これは、あらかじめ検索語を登録しておけば、新しいデータが到着する毎(1ヶ月に2度)に、登録した検索語に該当する文献のリストを出力し、提供するというものである。

検索対象となっている約7,000タイトルの雑誌のうち、立命館大学に所蔵しているものが約1,100タイトルあり、これらについては、所蔵状況の確認までが簡単にできるシステムになっている。

また、カラー印刷のリーフレットと詳細な利用マニュアルが作成されており、利用者への広報・利用案内もしっかりしていることが感じられた。

今後も図書館では各種のデータベースを利用した様々なサービスがおこなわれていくと思われるが、その新しいサービスのあり方の一つが示されていると感じた。

「日本の教科書の歴史とその収集・保存の現状」では、教科書の歴史、現在の所蔵状況や今後の課題が報告された。

特定の資料を調べていくためには、その資料の歴史を知っておくことが必要で、まずそのことが強調されていた。教科書といっても近代以前のものから明治を経て現代にいたるまで、内容から発行のされかたまでさまざまな変遷があり、それが国の制度等に関係して変わってきていることを知ることができた。

現在、教科書は教科書研究センターや教育系の大学などに所蔵されており、目録の整備も進められているが、まだ完全なものできていないようで、今後の課題として、副読本(これがまた揃っていない)を含めた資料の分担収集とその利用、戦後の教科書の「原稿本」「内閣本」「見本本」等の収集とその利用、教科書関係データベースの学術情報センターでの公開の3点があげられた。

教科書といえば誰でも手にすることがある出版物の代表のようなものであるが、なぜか全ての教科書を揃えている機関はないようだ。日常にありふれている出版物ほど、案外どこでも保存されていないものなのかも知れない。

「雑誌価格の高騰と図書館の対応」は、学術雑誌が高騰することの背景とアメリカ合衆国の大学図書館での対応についての報告であった。

ほぼ年10%の割合で雑誌価格があがっていく一方で、予算が増額されないとどうしてもタイトルの見直しが必要となる。そのために具体的にどのようにして教員の合意を得て

いけばよいのかということが具体的なマニュアルとなって示されていた。

購入雑誌を削減するかわりに、ILL（相互利用）やDDS（文献配達システム）といった情報環境の整備がおこなわれ、これらのサービスにかかる経費については図書館も一部負担することが当然と考えられているようで、すぐに「受益者負担」という言葉が出てくる某国とは事情が異なるようだ。

最近、自分のまわりの仕事にしか目が向かないことが多いので、今回、このような研究集会に参加できたことは、とてもよい刺激となった。

第2回京都研究集会に参加して

堀 豪範（京都大学数理解析研究所）

12月4日に行なわれた大図研京都支部研究集会に参加した中で、「海外における出版物の高騰と図書館の対応」についての感想を述べたいと思います。

篠原さんからアメリカの大学図書館を中心にした雑誌価格の高騰の状況や購入雑誌見直し等の図書館の対応について、詳細な報告を聞く事ができました。雑誌価格の高騰はどのように大学図書館を直撃したか、California Polytechnic State University Libraryの5年間の状況にはじまり、雑誌価格はどのように推移しているのか、価格はなぜ高騰したか、図書館はどのように対応したか、雑誌見直しの手順、図書館に与えた影響、また購入を中止した雑誌の利用にどう対応するか、等がその主な内容です。報告の後の討論の中で「財政難からこの雑誌を如何にして切っていくかと言うような話は非常に寂しい限りだ」という感想が出ました。本当にその通りだと思いました。とはいえ、私達の周囲でも切実な問題となりつつあり、現場の担当者にとっては具体的に工夫をしなければならぬので「購入雑誌見直しの13のステップ」は非常に参考になりました。2、3紹介します。

利用頻度調査。早めに着手せよ、データをコンピュータに入れて種々の要求に応じた文書作成を可能にしておくこと、研究者が自己の利益のみからタイトルを選定することも考えられるので、それを避けるため教員を巻き込む方式で図書館サイドで主導権をもつ、等です。私の経験では、図書館サイドの主導権が発揮されないと、カットするために見直し調査をしても逆にタイトルが増えて困った、という事がありました。また「削減対象に掲げられた雑誌タイトルについての優先度」についての報告は、（優先度1）＝削減の対象となっても文句のないもの、（優先度2）＝教員と図書館の担当者双方が保留とするもの（優先度3）＝どうしても削減せざるを得ない時以外は対象としない、（優先度0）＝削減リストに載っても、教員の希望により事実上無条件で救済されるもの、というように、実務担当者にとっては何らかの目安になるものでした。

アメリカの現場職員の苦しい現状に対応している姿をまのあたりに見た感じで、今まで言われてきたことですが、資料費を獲得するために、職員と教員が一体となって、如何に運動をしなければならないかを強く考えさせられました。時間の関係で、具体的な国内の報告がなかったのが、少し残念でした。しかし、担当者にとってこの報告は貴重なものでしたし、今回の研究集会は私にとって非常に有効なものであったと思います。

立命館大学雑誌コンテンツシステム を見学して

小林直子 (京都大学数理解析研究所)

1993年12月4日、立命館大学末川記念会館での研究集会の行事の一つとして、立命館大学学術情報システム+コンテンツシステムを見学させていただきました(遅刻してしまい誠に申し訳ありません)。まず情報システム課の方に説明していただいてから、実際に自由に端末に触らせてもらいました。使い心地は良く、オフラインの端末を使っているように、時間を気にせずに落ち着けました。ただ、このシステムに慣れていないので、道案内キーの表示が分かりにくくてもたもたしてしまいました。検索の仕方はいたって簡単で、キーワードによる検索は、単語に前方一致マークの*をつけるだけで、10個まで掛け合わせることができます。その他、雑誌タイトル、ISSNなどからも検索することができます。そしてコンテンツシステムは蔵書検索システムと連結しているからヒットした論文をもつ雑誌が自館にあるかどうかもわかります。便利ですね(蔵書検索システムからコンテンツを調べることができます)。コンテンツ・データ元の Swets & Zeitlinger社のタイトル数は約7000(洋雑誌)で、そのうち1100タイトルが立命館大学の所蔵データとリンクしていて、分野は理工学、医学関係のほか、主な人文・社会科学系の学術雑誌が含まれているそうです。導入して約11ヶ月、これからデータが蓄積されていけばもっと威力を発揮することでしょう。利用者の声とかも楽しみです。奉仕対象の多い中央図書館のようなところでは、機械化とかシステムの連結が大きな効果を生むだろうし、いろいろなことが可能になりつつある昨今だから、一歩先を行く試みをこれからも期待しています。



(コンテンツシステム・デモ風景)